

秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成25年10月1日(第1233号)



発行／(社)秋田県建設業協会
秋田市山王四丁目3番10号
TEL 018(823)5495
FAX 018(865)2306

秋田県

「新技術・新工法」説明会

8企業・団体が発表

9月19日、秋田県庁第二庁舎・8階大会議室において、秋田県建設部による平成25年度第1回「新技術・新工法」説明会が開催された。

公共事業のコスト縮減及び効果的な事業の遂行への理解を深めると共に、民間企業から新技術や新工法の説明を受けることで、発注者と受注者がともに技術力の向上を図ることを目的としている。

今回は8企業・団体が各自の技術・工法のプレゼンテーションを行い、県職員はじめ建設企業関係者100名以上の参加者が聴講した。

内容は次の通り。

- | | |
|---------------------------------|-----------------------|
| ①航空機レーザー測量システム……(株)パスコ 秋田支店 | ⑤ボンテラン工法……ボンテラン工法研究会 |
| ②クラックシールNX……秋田ニチレキ(株) | ⑥パワーストッパー……(株)横河ブリッジ |
| ③パルテム・フローリング工法……山岡工業(株)・芦森工業(株) | ⑦環境負荷低減工法……コマツ建機販売(株) |
| ④コンクリート矢板圧入工法……(株)技研製作所 | |

アス合

安全衛生・環境パトロールを実施

日本アスファルト合材協会東北連合会と合同

9月11日、秋田県アスファルト合材協会(加藤義光会長)は日本アスファルト合材協会東北連合会(宮村博三会長)と合同で安全衛生・環境パトロールを実施した。

このパトロールは毎年度、日本アスファルト合材協会東北連合会が東北各県のアスファルト合材協会と合同で実施しているもので、アスファルト合材工場の安全操業、労働環境、周囲環境の保全などの向上を目的とした業界の自主的な取り組み。

今回は秋田土建(株)米内沢アスファルト工場(北秋田市米内沢)をパトロール対象となり、東北連合会から派遣の本間悟氏(福田道路 東北支店 技術課長代理)、井上弘幸氏(佐藤渡辺 仙台アスコン所長)、藤永弥氏(東亜道路工業 東北支社 技術部長)を中心に、県北地区の会員参加者が場内を巡回し、各設備の配置状況や工場における安全対策の状況を確認した。

巡回終了後は、工場事務所で安全衛生に関する書類・諸帳簿を確認、また、参加者による会員相互で工場の安全操業等についての提案や意見交換が行われた。



秋田・鉄 路の情景

Vol.
12

「SL秋田こまち号」

JR奥羽本線羽後境～大張野間



文と写真／加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴／旅の手帖、WoodyLife、
ベンチャー・リンク、郷、ある他
海外取材歴／ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写楽 主宰／写真教室、撮影ツアー
企画等

秋田の観光を盛り立てる一大キャンペーン「秋田デスティネーションキャンペーン」の一環として、10月12～14日の三日間、奥羽本線秋田～横手間でSL列車が運行される。

昨今は鉄道ブームもあって、定期的にSL列車を運行しているJRの路線や鉄道会社もあるが、今回のように短期間イベント的に運行する場合は、本番前におおむね五日ほど試運転が繰り返される。つまり、今回の場合は延べ八日間にわたって秋田県内でSL列車の走行シーンを見られることになる。

一般には試運転に関する情報は公表されないが、熱心な鉄道ファンはどこかから情報を入手し、早々と人気の撮影スポットに駆けつけるのである。

ちょうど一年前にも秋田地区ではSL列車の運行があったが、今回の運行で特筆すべきは、牽引される客車が「旧客」と呼ばれる茶色の年代物の車両が投入されたことだ。年配の方であれば通勤通学あるいは旅行で乗ったことがあるはずで、懐かしく思われることだろう。やはり、SLが牽くのは古い客車の方が似つかわしい。

ただし、客車もそのままという訳にはいかない。現在の電車や客車の出入り口はほぼすべて自動ドアだが、旧客は手動。走行中でもドアを開けようとすれば開けられてしまう。昔の汽車通学の連中は、ドアを開けたままデッキにたむろして乗っていたという、今にして思えば危ない乗り方をする姿も珍しくなかった。

今の若い人たちは、客車のドアが手動だったということを知らない人も少なくないだろう。知らないが故に、万が一の事故が発生するおそれもある。そのため、SLが牽引する旧客には、発車時に自動的にドアが閉まりロックされるように追加の工事が施されている。

昔の客車のトイレが、“出したもの”をそのまま線路にまき散らして走る方式になっていた（だから駅に停車中はトイレを使わないのが暗黙のルールになっていた）というのも、今の人たちには想像つかないことだろう。さすがに今もそれをやるのは何かと問題があるので、イベント列車に使われる旧客はタンク式のトイレに改造されている。

ノスタルジーもいけれども、なにごと昔のままというわけにはいかないのだ。

岬めぐり

永井 登志樹

20代の初めころ、神奈川県鎌倉市に1年ほど住んだことがあった。そこでアルバイトをしていた喫茶店では、親睦と慰労をかねた日帰り遠足(レクリエーション)を時々行っていて、その行き先のひとつが鎌倉と同じ三浦半島にある観音崎だった。その時に東京湾を航行する船の多様さも含めた数の多さと、暖地生の植物が繁茂する岬の風光に強い印象を受けた。

いつだったかある高名な学者が、隠居したら観音崎の近くにアパートを借り、東京湾を行き交う船を1日中眺めていたい、と新聞のコラムに書いていた。それを読んで私も歳をとったら是非そうしたものだと思感を感じたのも、初めて観音崎を訪れた時の記憶が強く残っていたからだろう。

観音崎は東京湾の中でも水路が狭まった浦賀水道に面している。岬をかすめるように航行する貨物船、タンカー、フェリー、セーリングのヨット、漁船…、日がな一日それらを眺めて過ごせたなら、どんなに幸せなことだろうか、と今でも思う。

1970年代にヒットしたフォークソングのひとつに、「岬めぐり」という歌がある。演奏しているのは山本コータロー&ウィークエンド。作詞は「瀬戸の花嫁」や「翼をください」など数多くのヒット曲を手がけている山上路夫で、平易なことで綴られたシンプルな歌詞のなかに、恋人を失った悲しみと喪失感を漂わせた情感あふれる名曲だ。

この歌の「岬」とはどこかの「岬」なのだろうと、ずっと気になっていたのだが、最近になって三浦半島をモデルにしたと作家本人が語っていることを知った。三浦半島には観音崎のほか、剣崎、荒崎、長者ヶ崎などがある。私は四国の足摺岬、あるいは北海道の襟裳岬あたりのことを歌ったのかな、と思っていたのだが、確かに岬がたくさんある半島のほうが「岬めぐり」にはふさわしい。

私の住んでいる男鹿市も半島だ。だから三浦半島と同じく岬がたくさんあり、岬めぐりができる。生鼻崎、鶴ノ崎、金崎、館山崎、潮瀬崎、天ヶ崎、剣崎、長崎、金ヶ崎、弁天崎、ごんご崎、長久手岬、入道崎、日暮岬、大明神崎、八斗崎…。数えてみたら五万分の一地図に載っているだけでも、16ヵ所あった。

このうち館山崎は私が生まれ育った集落の西側にあり、母校である椿小学校(平成17年閉校)の校歌は、「館山崎の波青く〜♪」で始まる。作詞は秋田市土崎出身の詩人竹内瑛二郎で、竹内氏のご子息が私の高校時代の恩師であったのも何かの縁だろうか。館山の名から察せられる通り、岬の台地は中世末期の館跡(双六館)だ。敵に攻められた際、城主の奥方が絶崖から海に身を投じて果てたという伝説が伝えられ、「御前落とし」の名が残っている。

数年前、インターネットでこの館山崎の伝説を検索していて「でんでんむしの岬めぐり」というブログに出会った。自称岬評論家の「でんでんむし(ハンドルネーム)」さんが、日本全国津々浦々の岬(崎)を訪ね歩いた旅の記録(岬コレクション)が綴られていて、その情熱に圧倒されてしまった。ブログには「岬・崎・鼻データベース」も載せてあり、それによると日

本中の岬(崎・鼻を含む)の総数は「3703」あるらしい。さすが日本は海洋国家、海岸線が複雑に入り組んでいる島国であることが、この数字に表れている。

「でんでんむし」さんの岬行脚には遠く及ばないが、思い出してみれば私も結構な数の岬(崎)に足を運んでいる。そこでこれまでの旅の中で、館山崎や観音崎のように特に思い入れが深く印象に残った岬をひとつだけあげてみたい。その岬の名は沖縄県与那国島の東崎(あがりざき)。

日本の最西端の与那国島に渡ったのは、20代の終わりころ、もう30年以上前のことになる。与那国島は沖縄ことばで「どなん」と呼ばれているが、これは渡航が難しいという意味の「渡難」に由来するという。私は石垣島から定期船で渡ったのだが、途中の海域はいつも波が高く、汚いことばだが通称「ゲロ船」の名があるほど大揺れすることで知られる。私もそのことば通り、悲惨な目にあってしまったのだが、そうして渡った島の印象は、「どなん」の苦勞を忘れさせてくれるほど、印象深いものだった。

与那国島は東西に長く、東崎はその名の通り島の東端にある。ちなみに島の西端は西崎(いりざき)といい、晴れた日には台湾が見えることもあるという。尖閣諸島から約150キロの近距離にあるため、現在は自衛隊誘致で揺れている国境の島でもある。だが、当時はそうしたキナ臭い話には思いも及ばないのんびりした別天地であった。

周囲は約27kmしかないので、自転車でも1日でゆっくりまわれるのだが、着いた翌日にレンタバイクで東崎まで行ってみた。古くから与那国島で飼育されてきた与那国馬が放牧された岬の突端に立つと、すぐに「ニライカナイ」信仰に思いが及んだ。

「ニライカナイ」は沖縄など南西諸島と呼ばれる島々の信仰の基本的な概念で、そこは豊穡や生命の源である楽土であり、死者の魂が赴く異界でもある。遙か遠い東の海の彼方にわれわれの住むこの世界(現世)とは別の、神々の住む国(他界)があり、神々は年に一度そこからこちらの世界にやっきて人々に福を授け、また帰っていくとされる。

そのころの私は民俗学に惹かれ、柳田国男の『海上の道』や折口信夫の『マレビト』論などで言及される「ニライカナイ」に関心を抱き、これら民俗学者が著した沖縄関連の書籍を読み漁っていた。与那国島をはじめとする南西諸島への旅を計画したのも、私自身の興味のあるところを確かめたいと思ったからで、東崎はその実施検証の場のひとつだった。

岬には次のような歌詞が刻まれた碑が立っていた。
(与那国ぬ 島に渡てい 東崎(あがりざち) 登(ぬぶ)てい
見れば あん美(ちゅ)らさ波ぬ 花になゆさ 情き深さ
島ぬ 心(くくる)あらかわす 波ぬ花 いちまでいん いち
までいん 眺みぶさ)

これは沖縄本島出身のミュージシャン喜納昌吉がこの岬のことを歌った「東崎(アガリザチ)」の一節。私も歌詞と同じように、海の彼方を「いちまでいん いちまでいん(いつまでもいつまでも)」見あきることなく眺めていたことを、今でも折に触れて思い出す。